

6がわのくもの子の会だより

(H.27.5.21)

日清の日は、日ざしが強く暑さを感じてものの、この時期の風は、
 ニンちよいですね。小さな森のこども園では、のいちごみや、びめ
 をめざして、あちこちに出かけ、この時期限定の笑ひ、あおあおいた葉
 の葉は、風おびを感じています。 朝から出発して、夕方のお迎え時間
 まで一日歩きとおして活動したりして、この自然を満喫していますよ～

～ 感性を育てるには、観察が大切 ～

「セン、オグワダー」という本でわが国では有名なR.カーソンは、
 自分の子がまだ一歳のころ、真夜中の海岸につかえていて、その時しか
 出てこないカニの行列をみせたというエピソードを書いています。感動に
 して見る(さく、かぐ、味わう...)これが何よりも人間の感性を
 高めてくれるのです。

保育園や幼稚園の子どもたちと散歩にいても、先へ先へと
 進ませようとして、途中で子どもたちが見つけた花や草を採ろうとするを
 禁止するおとなの方がよくありますが、興味をもつて自体を励ます
 ことが目標になれば、さあさまに工夫することも可能でしょう。
 そもそも散歩は、単に運動や気晴らしのためにするのではなく、
 子どもたちに自然と豊かに交感するチャンスを与えるためです。
 何かを感じ、見つめる、においを何度も何度も確かめる、
 耳をそば立ててしっかりさく、手でつかんで感触を確かめる、風の

そよぎのちがいを肌で感じる.....等々、幼いこ
 にしっかりと体験させてやりたいものばかりです。
 感性による情報処理は直観的、全体的ですが、
 それだけに概念による知識の巧みに言葉や数に簡単
 には変換できません。表現にいろいろなあらわれ方
 のです。そのため、感性による知は一般に軽視
 されがちですが、本当は人間はものやこにまず
 感性により対峙しているわけで、ものこに対して
 深くかかわりをもった上で認識できるおこなうため
 には、感性による知の活動が豊かであることが
 絶対的な条件です。

<沢見稔幸、か(こま、てなめに乳幼児期の
 知育を育てる所)>

